

アメリカの歴史学者L・ホワイト・ジュニアが一九六八年に発表した『機械と神』にある「現在の生態学的危機の歴史的根源」という論文は当時の学術社会に衝撃をもたらした。キリスト教以前の宗教は人間と自然を対等としていたが、キリスト教は人間が自然の感情を意識せずに搾取することを可能にし、それが環境問題の原因だと喝破したからである。

その根拠は『旧約聖書』冒頭の「創世記第一章」に記載されている。神は天地を創造してから六日目に人間の男女を誕生させ、その人間に「海の魚と空の鳥、地のすべての獣を統治せよ」と伝達したという文章である。これを根拠に自然を搾取してきた人間が地球の生態学的危機をもたらしているというのがホワイトの趣旨である。

この葛藤の名残として、ヨーロッパ中世の石造の教会建築にグリーンマンと名付けられている装飾がある。人間の頭部や身体が樹木で裝飾されている彫刻である。意図についての定説はないが、自然崇拜を基礎としていたケルト文化やローマ文化の世界に浸透してきた新興のキリスト教会の教義に抵抗した名残という解釈もある。

一九六〇年代のアメリカから発生したカウンターカルチャーを信奉した若者たちの活動を支持した大学教授C・ライクが一九七〇年に出版した『綠色革命』は「若者の革命がアメリカを快適にする」という副題が象徴するように、ベトナム戦争を推進する当時の政権を批判する若者を応援する内容であり、ベストセラーになった。

アメリカは一九七〇年代にアリューシャン列島の孤島アムトチカで原子爆弾実験を計画した。これに反対した人々が創設したのが環境の平和を意味する「グリーンピース」である。以後もフランスが南太平洋のムルロア環礁で実施する実験にも反対していたが、次第に対象を拡大し、捕鯨などにも反対する団体に成長していった。

世界には「スコティッシュ・グリーンズ」「グリーン・パーティ・オブ・ザ・ユナイテッドステーツ」「グリーン・パーティ・オブ・カナダ」「台湾緑党」「ウガンダ・グリーン・パーティ」「グリーン・パーティ・オブ・エジプト」「ジ・オーストラリアン・グリーンズ」など、党名にグリーンを使用している政党が五〇近く存在する。

これらの政党がグリーンを名乗るのは環境問題への関心も表明しているが、綠色革命やグリーンピースと同様、既存の社会秩序の変革を目指すことを明確にする目的である。グリーンが自然環境を象徴する色彩であることに異論はないが、それ以上に既存の社会秩序を改変する意欲を表明している象徴と理解すべきである。

二〇〇〇年にメキシコで開催された科学会議で「人新世」という地質年代を設定すべきであるという意見が登場した。これまでの「石炭紀」「三畳紀」「白亜紀」などの地質年代は天変地異による環境激変を基準に区分されてきたが、現在の地球環境の危機は激増した人間の活動が原因であるという意味である。

環境問題へ貢献する活動としてグリーン消費、グリーン経済、グリーン産業などの概念が提唱されているが、それらは既存の社会活動の修正でしかなく、グリーンウォッシュ（偽装）という言葉さえある。「人新世」の出現を回避しようとするのであれば、過去数万年間の人間の活動を再考するグリーン革命の視点から人類社会の見直しが必要である。